

文字もじMOJIの世界

7. 文字情報技術促進協議会主催シンポジウム顛末

袴田 博之*

2017年12月1日、ここは赤坂某所のイベント会場。400席の会場がみるみる埋まっていく。自ずと高まる熱気の中、いよいよシンポジウムがスタートした。

* * *

文字情報技術促進協議会会員持ち回りのこのコラム、今回は趣向を変えて、協議会が主催したシンポジウムの顛末をお届けしたい。

* * *

7月某日の協議会懇親会の席で、会長小林龍生さんから「文字情報基盤整備事業の国際標準化が年内には完了する見込み。この事業成果の発表を含め、各社のソリューション紹介をするようなセミナーを開催したいのでまとめて」と無茶振りされたところからこの話は始まる。

本誌読者には馴染みが薄かろうが、文字情報基盤は行政用文字を整理すべく、経済産業省の委託事業として情報処理推進機構（IPA）が長年取り組んできた事業であり、協議会の中で、この文字情報基盤の成果の活用を推進するのが導入支援部会である。

この導入支援部会に参画しているITベンダー有志各社を中心に本格的に動き出したのは9月初頭。通常ならば準備に半年は掛けるところが、文字情報基盤の国際標準化完了のスケジュールに合わ

せると年内には開催したい。とにかく時間がない。

まずは会場

なによりも開催日を決めるのが先決。当初11月初旬を目論んだもののさすがに無理ということで、12月1日を軸に会場を探すも、なかなか見つからない。

やはり遅すぎたよなあとボヤきつつ、いろいろ当たった結果、ようやく赤坂某所を押さえることができた。会場関係者の弁では300～400名は入れますよとのことだが、今からそんなに集客できるのか？と一抹のいや大きな不安がよぎる。

講演者に大物を

日程も会場も決まった。集客には何よりも講演者の顔ぶれが重要である。協議会メンバーでもあり、文字情報基盤整備事業を引っ張ってこられたIPAの田代秀一さん、部会長兼事務局長でもある日本マイクロソフト田丸健三郎さんに講演していただくとして、協議会の外から行政の大物を引っ張ってこよう。

田代さんの人脈により、文字情報基盤整備事業の火付け役である内閣官房 政府CIO 席補佐官の平本健二さん、元総務省高度通信網振興課長として地方自治体の外

字利用実態の調査を手掛けた、現地方公共団体情報システム機構（J-LIS）個人番号センター長 藤原通孝さんに御講演を快諾いただくことになった。ここまで、わずか1週間ほど。大物の招請にこぎつけたことでメンバーの士気も上がる。

「セミナーではなくシンポジウムにして、パネルディスカッションで泥臭い本音の話も出るようにしてさらに盛り上げよう」と方向転換。地方自治体の現場で苦勞されている方に参加していただくということで、有志メンバー某氏の人脈で石巻市役所の千葉俊介さんに参加を打診して快諾いただく。協議会メンバーの人脈恐るべし。

さて、シンポジウムのタイトルはどうでしょうか。有志メンバーで議論する中で、国際標準化の完了は大きなマイルストーンであり、この機にITベンダー、特に情報システムの調達要件を大きく左右するITコンサル各社に、国際標準の進展と現状とのギャップに危機感を持ってもらう機会であることを強く訴えたいという方向性は見えてきた。しかし有志メンバーが出した案はどれも固いというか訴求力に欠ける。ここで小林会長がしばし沈思黙考した上で「激変する文字コードの世界。とりのこされないうちに。」はどうかと提



「激変する文字コードの世界。とりのこされないために。」をテーマに開催した、文字情報基盤国際標準化シンポジウム（2017年12月1日、TKP赤坂駅コンファレンスセンター）

案。元編集者の力量を見せつけられて一同納得。

このように光速の如くに次々と物事が決まってく様を筆者はただ茫然と眺めるのみであった。

集客は間に合うのか？

シンポジウムの骨格は固まった。問題は集客である。行政用の文字関係のイベントで300～400名？相当に高いハードルである。本来ならば、IT関係で影響力のある雑誌・ニュースサイトへ告知を掲載したいところだが、時間的に無理である。メンバーおよび協議会会員の人脈を駆使して口コミで広げるしかないと思腹を括る。最も集客した人にご褒美を出すよとの小林会長の一言で目の色を変えて集客に走るメンバー達。物欲も使いようである。

いまどきはイベント告知サイトを利用するのが当たり前でしょうと当たりを付けるまでは早かったものの、諸々の手続き・連絡の不備もあり、参加受付サイトの開始は11月6日にずれ込んだ。11月9日時点で参加申し込み人数はわずか9名と立ち上がりがすこぶる悪く、顔色を失う。イースト下川さんから協議会の賛助会員でも

ある日本電子出版協会（JEP）のメーリングリストに告知するよ、とありがたい申し出をいただく。口コミを広げる地道な努力もようやく効いてきたか、みるみるうちに参加者が増加。告知開始から10日目の11月17日には参加申込者が200名近くに達し、何とか恰好が付く水準にきた。最終的には300名近くの事前申込を数えるに至る。

自律的な当日運営

筆者は運営幹事長として仕切る立場にあったものの、この手のイベント運営は初体験であり「シンポジウム運営マニュアル」でググって勉強したのはここだけの話。会員各社からはベテラン・中堅・若手取り混ぜて当日運営に参加してくれた。各所に経験豊富な方々をリーダーとして配置したおかげで、自律的に動いてくれた。

講演では、まず田丸さんが文字コード技術入門編を、田代さんが、国際標準化に至る道程を丁寧に語った。さらに、平本さんが、行政の高度IT化を目指す戦略の一端を紹介。最後に藤原さんが、地方行政現場での文字利用に関する大掛かりな調査によって明らかにな

った実態を語った。

それぞれ濃密な内容ながらも洒落な語り口で、当日参加者だけにとどめるには惜しいと思える内容であった。

人材育成の場

シンポジウム終了後の懇親会。盛況に終わったシンポジウムの熱気が残るなか（会場が狭いからということも多分にあり）、大先生や大物官僚と企業の若手社員が分けて隔てなく歓談している。

日本語学の重鎮 聖徳大学の林先生が、文字情報基盤整備事業に携わった若手某氏を「井戸を掘った功績は後世に残る」と賞していた。この領域は後継者を育成するのが難しい。今回のシンポジウムは若手育成の恰好の機会でもあった。

* * *

当日参加者に加えて参加できなかった方々からも資料の開示を依頼されている。協議会にとって貴重な財産であり、有効な活用方法を議論している。

小林会長からは、シンポジウム本番もさることながら、シンポジウム企画の準備会合が面白かったとの評。有志各位の熱い思いにより、ともすれば脱線気味になる議論の交通整理に難儀することもあったが、その場で交わされた議論は今後の協議会運営に資する材料にも満ちていた。（つづく）

*HAKAMADA, Hiroyuki
日本電気株式会社
クラウドプラットフォーム事業部 シニアマネージャー
〒211-8666 神奈川県川崎市中原区下沼部1753
h-hakamada@ct.jp.nec.com